

第 25 期日本学術会議健康・生活科学委員会看護学分科会
第 5 回会議録

開催日時：2021 年 10 月 29 日（金） 13:00～15:00

場所：ビデオ会議

参加者：小松、西村、浅野、井上、太田、片田、萱間、神原、坂下、新福（記録）、田高、菱沼、三重野、南、森山、山本、綿貫

欠席：真田、多久和、寶金、吉沢（敬称略）

【議題】

（1） 第二部夏季部会等報告

小松委員長より、日本学術会議の科学的助言の考え方が報告された。内容として、できるだけ社会的にニーズの高いものに関してインパクト高く活動を行っていきたいこと、提言、見解、報告の表出方法について説明された。

今後世界・我が国が直面している課題に意見を出していくため、連絡会議を設け、部や分科会を超えて活動を行っていくこととなった。「パンデミックと社会に関する連絡会議」が立ち上がった。現在課題を集約しており、フィードバックがある予定である。先日望月副会長から看護分科会からの意見が助けになったという声があった。また、シンポジウムの登壇者の性別の偏りについて、努力目標として男女の偏りのない登壇者を考慮することが求められるようになった、ということが報告された。

（2） 各班の活動状況と今後の取り組み

① 看護イノベーション班

萱間委員より、以下の説明がされた。2021 年 9 月 25 日（土）13:00～16:00 開催された公開シンポジウム「With/After コロナ時代の看護とデジタルトランスフォーメーション」は、回答数 217 [参加登録：859 名、当日視聴者数約 500 名で、アンケートへの回答は 217 名]であった。運営を外部委託し、JANA と共催で費用を支出した。シンポジウムのニュースソースは、学会・JANA からのメール、知人や ML だった。所属は 7 割が大学だったが、臨床の方も 2 割だった。好意的なコメントが多く、今後さらに関連分野や臨床への実装を扱ってほしいという要望があった。

日本の医療現場の実際はまだデジタルトランスフォーメーション(Dx)を構築する体制が遅れており、保健師のリテラシーが高くないことも指摘されているが、住民の声を含めて議論できるリテラシーや研究が必要であること、そのような看護人材の育成が必要であるが、指定規則の改定で Dx に強い人材を育てるのが難しくなっていること、今

後言われているマイナンバーカードと保険証の一体化によるデータ集積の話は、実態が追いついていない。社会学領域からの強い反対があり、看護では人々の情報に対する理解をくみ取る必要があることが議論された。

② 地元創成看護班

西村副委員長より、JANS41-JANA の共催シンポジウム企画『『地元創成看護学』の実装—新型コロナウイルス感染症拡大下における看護系大学の活動および地元ステークホルダーとの関係構築と発展』について共有された。兵庫県と兵庫県看護協議会等との活動をモデルケースとして、他県が参考にできる内容になっている。日本学術会議の活動を JANA と JANS の共催のもとで報告したいと思っていると報告された。加えて、資料の第4回地元創成看護班会議議事録に沿って、議論の内容が説明された。兵庫モデルに加え、東北、沖縄などの事例も含めてまとめ、学術の動向、もしくは報告の形で表出していくことを考えており、更に様々な場所で周知したり、対談企画等も考えていると伝えられた。

南委員より、地元創成看護という概念の受け入れが他の学問、学長レベルでも良いこと、広く宣伝し、教育を進めることが必要であることが述べられた。また、片田委員、太田委員より、他の大学から提言を参考にした報告書が届けられたことが報告された。提言の波及性をどのようにピックアップしているのかという疑問が投げられ、西村副委員長より、波及効果を調査する計画もあり、十分に活動した後に全国の看護大学に調査をすることを忘れないようにしたいと回答があった。

小松委員長より、データを集め、またその後に社会に表出していけると良いと述べられた。まずはシンポジウムに参加して活発な意見交換をしてほしいこと、社会性を持った科学が危機の時代だからこそ重要だと言われており、現場から積み上げた科学が重要であると伝えられた。

(3) シンポジウム企画について

小松委員長より、健康・生活科学委員会のシリーズでシンポジウムを取り組んでいくこと、第1回目がパブリックヘルス分野で「社会に求められる公衆衛生人材」というシンポジウムを12月に開催予定であり、第2回で看護系人材、特に危機の時代に求められる看護系人材ということを考えてみたいと提案があり、意見が募られた。看護系人材の必要性について広く考えられるシンポジウムにしたいこと、国や自治体が求めているもの、地域住民から、医療現場の視点で実効性のある形で意見交換ができるシンポジウムが良いのではないかと。求められる人材をどのように確保し、育成していくのか。できるだけ色々な関係者を巻き込んでできるとよいと伝えられた。

森山委員より、新型コロナウイルス感染症の状況では人材の配置ができなかったこと、保健所における保健師の不足の課題、離職者について、感染症対応・救急医療を担う看護者育

成、医師も看護師もいるプライマリ・ケアシステムで、データ収集しながら、世代間を通じて看護師がケアしていけるプライマリシステムの構築をする必要性、高度実践看護師を増やし、公的責務の重さの教育、離職防止の必要性、スチューデントナース制度の構築について話題提供があった。

南委員より、共有された資料について説明があった。学長や他の分野に向けて、今回の新型コロナウイルス感染症で保健師がクリティカルケアに関わらざるを得なかったこと、入院が必要な人が入院できなかった状況、またそのデータの欠落、保健所と大学の連携や地元創生看護について書いたものであると伝えられ、実態の検証の必要性が議論された。

以下の論点が挙げられた

- ・ ナースとしてもっと自由な国家制度を学術会議で議論すべきではないか。保健師がどうして全てを担わなければならなかったのか。これだけいる看護師が、保助看法に縛られて動けなくなってしまった。もっとフレキシブルに動けるような提言ができれば（井上委員）。
- ・ 保健所市町村の保健師のマンパワー不足や直面した困難は、保健師の落ち度ではなく、行政の危機管理体制がもたらしたものであったとの指摘がある。そこでこれからの教育現場ではどのような変革が必要なのか。保健師のマンパワー不足や困難に対応するような教育改革の中身に何を代入していけばいいのかという議論があっても良いのではないか。
- ・ 保健師、看護師と名を出されると、批判されたように感じる。教育としてどうするか、現場に何が必要だったのかをお互いきちんと話し合うことが必要。システムか、人材なのか、がんじがらめにならないといけなくなった状況の問題だったのか、きちんと見ていく必要がある。（片田委員）
- ・ 「コロナの在宅死を再び起こさないために看護師はどうしたら良いか」というタイトルも考えられるかもしれないこと、酸素投与とステロイドとわかっていることがありながらそこに手を入れられない状況をなくしていくにはどうしたら良いかというのをみんなで考えられたら。（菱沼委員）
- ・ 家庭内療養、家庭内の感染が拡大していった。それをどう防いでいけるか。小児や家族関係が抜けていた。市民から見てどうなのかが入った方が良いと思う。（浅野委員）
- ・ グローバルに見ると、特に開発途上国では、まだ1回目のワクチンも打っていないという人が多いという格差の課題がある（新福委員）。
- ・ 市民の視点、行政の立場、他職種の方、シリーズもので、まずはグローバルでいくのか、1回で多様なご意見をいただけるのか。取り組みの課題から共通することを出したり、特徴的なことを出したり、両方があるかと思う。（綿貫委員）
- ・ 南委員のおっしゃっていた、地域での医療、訪問看護などと行政の連携、情報共有がまだうまくいっていない。互いの役割期待がわかりにくい。行政もどういう風に

アプローチしたら良いかわからない。これは学会単位でもとりくむ必要がある。(萱間委員)

小松委員長より、地域のことを中心に4人くらいでまとめ、以後メールにて講師の案もいただくようにすること、2,3月を目処に起案することが伝えられ、合意された。

(4) その他

特任連携会員として感染症ナースの分科会への参加について議論された。